

トロロープのアイランド

藤 居 亜矢子

はじめに

アイランドとイギリスは地理的に隣接しているため、古くから政治的・社会的・文化的に深く関係してきた。特に1801年に併合法が施行され、アイランドが連合王国の一部となってからはますます深く関わるようになった。この頃、さまざまな機会を求めてイングランドからアイランドに渡ったイングランド人が多数存在した。歴史家 R. F. Foster は、*Paddy & Mr. Punch* において、このような人物のことを「境界人 (marginal men)」と呼んでいる。「境界人」は、文化の境界に身を置く人間、つまり、この場合はアイランドとイングランドという二つの文化に接する人間であった。作家アンソニー・トロロープ (Anthony Trollope 1815-82) はこの典型例として名前が挙げられている。

トロロープは多作で知られており、長編小説48冊 (自伝・死後出版も含む)、短編43編、旅行記5冊、伝記3冊、劇2作を執筆している。多くの作品の中でも、イングランドの架空の都市 Barset を舞台にしたシリーズが特に有名であるが、アイランドをテーマにした作品も執筆している。トロロープがアイランドと関わるようになったのは、ほかの「境界人」と同じく、イングランド社会では出世の見込みがなかったためである。イ

キーワード：アンソニー・トロロープ、19世紀イギリス小説、Phineas Finn

ングランドでは出世が叶わなかったものの、郵便職員としてアイルランドに赴任してからは、これまで順調とは程遠かった人生が好転していく。妻と出会い結婚したのも、子供が生まれたのも、小説を書き始めたのもアイルランドに来てからである。アイルランド併合によりトロローブはアイルランドでは何もせずとも支配者階級に属することになる。その結果、イングランドでは難しくとも、アイルランドでは地主の屋敷においても紳士の待遇を受け、歓迎された。アイルランドにおいて望んでいた自分の姿を手に入れることができたのである。トロローブは様々な地域を旅しており、ヨーロッパやアメリカはもちろん、アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、西インド諸島などを訪れている。そのなかでもアイルランドが生涯特別な土地であり続けたのは、自分の人生を良い方向へと変えてくれた場所であったからである。また、アイルランドは小説家としてのトロローブにとっても切り離すことができない重要な要素である。最初の2作品はアイルランドを舞台にしたものであった。イングランドへと帰還したのちもアイルランド出身の青年を主人公とした小説などを執筆している。トロローブが執筆途中で死亡したため、未完成に終わることになったが、最後の作品 *The Landleaguers* (1883) もアイルランドを舞台にした作品である。当時、アイルランドをテーマにした作品はイングランド読者には不評であった。それにもかかわらず、トロローブは最後までアイルランドに関心を抱き続け、アイルランド固有の問題を読者に伝え続けたのである。

アイルランドを主題とした作品の中で最も注目に値する登場人物が Phineas Finn である。Phineas は *Phineas Finn* (1869, 以下 PF) および *Phineas Redux* (1874, 以下 PR) の主人公である。Phineas は政界での成功を夢見て奮闘するものの、自らのアイリッシュネのため宗主国イギリスではさまざまな困難に直面する。たとえば、PR では同僚殺害の容疑のため、裁判にかけられることになる。トロローブ自身が自叙伝 *An Autobiography*

(1883)において “It was certainly a blunder to take [Phineas] from Ireland (318)” と Phineas をアイランド出身に設定したのは失敗だったと述べていることもあり、Phineas のアイリッシュネスは軽視されがちであった。しかし、近年の研究を見ると Dougherty や Lonergan のように Phineas のアイリッシュネスに注目する研究が登場している。日本ではいまだ十分に検討されているとは言えない状況であるが、トロロープのアイランド観とその変化を理解するうえで Phineas の存在はきわめて重要である。

Phineas がトロロープにとって重要な存在であることは、執筆時期から窺うことができる。*PF* および *PR* は1860年代後半から70年代前半にかけて執筆された。この頃、アイランドの問題がそれまでよりもイギリス内で意識されるようになっていた。特に、*PF* が書かれた1866年～67年にはフィニアン (the Fenians) が活動していた。フィニアンは1858年、アイランドとアメリカにおいてアイランド独立を目標に結成された秘密結社であり、1867年にダブリン各地で蜂起した。運動自体は失敗に終わったものの、イギリス国内に大きな影響を与えることとなった。フィニアンの活動により、政府はアイランド問題を根本的に解決していく必要があると判断した。その結果、1869年にはアイランド国教制度を廃止し、1870年には小作人の権利を保護する第一次土地法を成立させるといった改革を実施していく。また、多くの知識人がフィニアンに反応を示し、アイランドとイングランドの関係はいかにあるべきかという意見を述べている。例えば、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill 1806-73) は『イングランドとアイランド』 (*England and Ireland*, 1868) において併合の利点と併合継続のためにはどうすべきかを論じている。一方、アイランドでも、1870年ごろから自治運動が取り上げられ始めていく。このように、Phineas が登場する小説が執筆されたのは、アイランドとイングランドの関係が大きく変わろうとしていた時期であった。

アイルランドについてどのイングランド人よりもよく理解していると自負するトロローブがこうした動きに反応しないはずがない¹⁾。「台頭してきたフィニアンに就いて、英国とアイルランドの併合継続に賛成する意見を述べたいと、トロローブは考えている」²⁾と Dougherty が述べているように、この時期に敢えてアイルランド出身の Phineas を主人公とした作品を執筆したのは、ミルたちと同じくフィニアンを意識し、アイルランドとイングランドの関係について自らの見解を示すためであると考えられる。実際に、*PF* では、“It had been all very well to put down Fenianism, [...] and everything that had been put down in Ireland in the way of rebellion for the last seventy-five years” (*PF* 2: 180)と、アイルランドの独立を望むフィニアンを非難している。こうしたことから、トロローブは自らの主張の伝達に役立てるために Phineas を創り出したと考えられる。また、Phineas は *PR* でも主人公として登場し、それ以後に執筆された *The Prime Minister* (1876, 以下 *PM*) および *The Duke's Children* (1880) にも登場する。いずれもアイルランド自治運動が激化していく1870年代以降に執筆された作品である。このことから、トロローブは自らの主張を伝えるために Phineas を利用し続けたと考えられる。そのため、複数の作品に登場する Phineas はトロローブのアイルランド観だけではなく、年月の経過により変化した部分または変化しない部分について理解するうえでも重要な存在であることがわかる。

トロローブが作品において、アイルランド固有の問題やイングランドとアイルランドの関係をどのように描写しているのかを検討する。また、トロローブの内面的変化が Phineas の性格描写 (characterization) に与えた影響について、Phineas Finn を主人公とする作品である *PF* および *PR* を中心に分析していきたい。

(1) Phineas Finn の人物設定

まず、トロロープが主人公 Phineas Finn をどのように描いているのかを分析していきたい。アイランドをテーマにした作品では、イングランド人としての態度、アイランドに対する共感、さらに小説家としての立場など、さまざまな要素がひとつの作品に共存することになる。Phineas の設定にもさまざまな態度が共存している。

主人公 Phineas は、Finn 医師の長男として中流階級に生まれる。父はカトリックであるが、母はプロテスタントである。アイランドはカトリック、イングランドはプロテスタントと結び付けられて考えられてきた³⁾。そのため、Phineas の存在自体がアイランドとイングランドの結婚、つまり併合の産物であることがわかる。その結果、Phineas はカトリック教徒であるものの、プロテスタントの特徴も併せ持つことになる。たとえば、プロテスタント系のアイランド人が多いトリニティ大学で教育を受けている。また、卒業後は、父の勧めるダブリンではなくロンドンで国会議員として成功したいという野心を抱くようになる。「アイランドのプロテスタント教徒は出世することしか考えていない」とイエイツ (William Butler Yeats 1865-1939) が述べたように⁴⁾、立身出世を望む性格はプロテスタントの典型である。それでもカトリック教徒に設定してあるのは、アイリッシュネスのイメージ形成のためであると考えられる。

19世紀イギリスには、Phineas と同じくアイランドからイングランドに成功を求めて移住したアイランド人が多数存在した。Foster はこのような人物のことを、「出世を求めるアイランド人 (micks on the make)」と呼んでいる。アイランド人でもカトリック教徒は下層階級に属したことから偏見の対象となることが多かった。彼らは酒癖が悪く、暴力性を秘めている怠け者であるという否定的なイメージで見られることも

あった。Gilley が「アイルランドに対する偏見は、政治的事件によって直接引き起こされている」と述べているように⁵⁾、アイルランドがイングランドの政治問題になるとき、いっそう否定的なイメージで描かれることが多かった。しかし、「反アイルランドという偏見は、民族よりも所属階級によるところが大きい」と Foster が述べているように⁶⁾、中流階級の移民は特に偏見の対象になることもなく、うまく社会に溶けこみ、医師、弁護士、ジャーナリスト、国会議員などの職に就く者もいた。トロロープが創り出した Phineas Finn はまさにその「出世を求めるアイルランド人」の一例である。実在の人物には、トロロープと同じハロー校出身で友人でもあるウィリアム・グレゴリー (William Henry Gregory 1817-92)、議員として Phineas と同じ役職についていたチチェスター・パーキンソン・フォーテスキュー (Chichester Parkinson-Fortescue 1823-98)、Phineas と同じ中流階級出身でロンドン社会に受け入れられたジョン・ポープ・ヘネシー (John Pope Hennessy 1834-91) などがあるが、全員アイルランド出身の議員でアイルランドのために尽力した人物たちである⁷⁾。Phineas はこうした実在の人物をモデルにして創られたと考えられている。

当時アイルランドが文学作品や雑誌などに登場するとき、肯定的イメージで描かれる場合もあったが、否定的イメージのほうが支配的であった。そのため、トロロープは読者の共感を得るため、Phineas を好意的に描こうとしている。たとえば、Phineas はみなに好かれる人物として次のように描かれている。“It soon came to be admitted by all who knew Phineas Finn that he had a peculiar power of making himself agreeable which no one knew how to analyse or define. [...] It was simply his nature to be pleasant” (PF1: 118). こうした感じのよさに顔のよさも加わり、公爵の催すガーデンパーティーにも招待されるほど社交界に受け入れることのできる人物として設定されている。外見は彼に好意を寄せる女性が “he was as hand-

some as a god.” (PF 1: 136) と称賛するほどである。また, “there was, too, a look of breeding about him which had come to him, no doubt, from the royal Finns of old, [...]” (PF 1: 136) とあるように、野蛮さとはかけ離れた、高貴なイメージが付け加えられているなど、アイランド生まれであることが不利に働かないよう好意的に描写されている。「Phineas の流暢さ、魅力、育ちの良さは、トロロープがアイランドで愛する全てを象徴する」と Foster が述べているように⁸⁾、Phineas の人物形成には小説を成功させるという意識だけではなく、アイランドに対する賞賛も込められていることがわかる。

Phineas の設定には、当時のアイランドについての一般的なイメージも使用されている。当時、アイランド併合 (Act of Union) はイングランドを花婿、アイランドを花嫁に喩えて結婚の比喩で描かれることがあった⁹⁾。そのため、アイランド生まれであるがゆえに、Phineas も男性でありながら、女性の立場に置かれることがある¹⁰⁾。たとえば、Phineas が友人に政界へ誘われる場面を Dougherty が求婚の場面に喩えているように¹¹⁾、Phineas と政党の関係は、党を夫、Phineas を花嫁とする一種の結婚として描かれている。女性の比喩は、党との関係だけでなく、イングランド女性 Laura との関係にも当てはまる。イギリスの政界にあかるくない Phineas は政治についてよく知っている Laura の “political pupil” (PF 1: 76) となり、彼女の指導を受けることになる。男性が女性を指導するのが小説ではよく見られる関係であるが、「従来の性別における役割が逆転している」と McMaster が述べているように¹²⁾、男性である Phineas のほうが導かれる立場にある。さらに、Laura を助言者である Mentor、自分を弟子である Telemachus に喩えている。Laura は Phineas が政界で成功できるよう全力を尽くし、Phineas の方も Laura を頼りにしている。Phineas と Laura との親密な関係は、アイランドの成功をイングランドが助ける

というトロロープにとっての理想的な関係を象徴している。また、女性扱いは単なる比喩にとどまらず、物語の後半において、Madame Goesler という女性から求婚されることになる。

トロロープは Phineas に女性のイメージを与え、当時の慣習により政治の領域からは排除されている女性との連帯を描いている。このことから、Phineas を国会議員に設定しているものの、政治的に中心となるイングランドに対して、周辺のアイルランドという関係が想定されていると考えられる。また、Phineas に政党の花嫁というイメージを与えているところにも、妻であるアイルランドには政治の領域での活躍を望まないトロロープの態度が窺える。こうした Phineas の扱いにはイングランド人としての態度が示されている。

トロロープは女性としてのアイルランドという当時のアイルランド像を Phineas に与えている。そこには成熟した大人の男性であるイングランドがアイルランドを導き、保護してやらねばならないという植民地主義的主張が垣間見える。しかし、同時に否定的なフィニアン（Finnian）のイメージから Phineas を切り離すことができるという利点がある。当時の『パンチ』誌などの挿絵をみると、同じアイルランドの人間でもイングランドに反乱を起こそうとする場合は男性、イングランドに協力的な場合は女性の姿で描かれていた。一例を挙げると、フィニアンが活動していた時期では、フィニアンはサルや蛮人のような男性の姿で描かれ、イングランド側のアイルランドは女性の姿で描かれていた。フィニアンは古代アイルランドのフィアナ騎士団に起源を持ち、騎士団は Finn MacCool によって率いられていた。そのため、Finn という名前はフィニアンを連想させるものである。しかし、Phineas に女性のイメージを与えることによって、彼がイングランドと友好的な関係にあることを示すこととなる。加えて、男性的なフィニアン（Finnian）のイメージから切り離すことも可能となる。こうした Phineas の丹念な

人物設定はトロロープの小説家としての成熟を意味している。また、イングランドを舞台にした小説に Phineas というアイランド要素を取り込むこの作品は、アイランド併合を実施したイギリスを暗示するものといえる。

このように、Phineas は実際の人物を基にしつつ、トロロープのアイランドへの好意、イングランド人としての立場および読者への配慮といった様々な要素が合わさって創られていることがわかる。

(2) 失敗した結婚としてのアイランド併合

PF では、イングランドとアイランドの併合は、Phineas と党との関係という具体例、登場人物たちの結婚という比喻により描かれている。特に、Phineas の党との関係と Laura の結婚は失敗した結婚として描かれており、アイランドとイングランドの併合と様々な点で重ね合わせることができる。トロロープは Phineas と Laura という具体例によって、併合の問題点を読者に伝えようとしている。

Phineas は Laura の助けもあり、党内で順調に出世していくが、役職を得るまでには至らなかった。当時、国会議員は名誉職で役職のない議員は給料を得ることがなかった。経済的な心配をする必要のないジェントリー出身の議員たちと違って、役職を得ることは Phineas にとって死活問題に等しかった。役職を得るためには、自分の所属する党が優位に立たなければならない。そのためには、自分の意に沿わない法案にも賛成しなければならないことがある。議員になる前に、Phineas は次のように警告されていた。

[The] party [...] required that the candidate should be a safe man, one who would support ‘the party,’ — not a Cantankerous, red-hot semi-Fe-

nian, running about to meetings at the Rotunda, and such-like, with views of his own about tenant right and the Irish Church. (*PF* 1: 6)

このように、党の利益を優先し、党を支持する議員こそが必要とされ、自分の意見を主張し、党を支持しない人間はフィニアンなどの反乱分子と結び付けられている。フィニアンがアイルランドとの併合にとって邪魔な存在であるように、Phineas が党の方針に反する行動をとれば党との関係が危うくなる。経済的に豊かである党の中心人物と貧しい Phineas はイングランドとアイルランドの経済格差を表している。経済的基盤が確立していないため、一方的に忠誠心を要求される Phineas の姿には、経済的にイングランドの恩情にすぎないため、自由に政治的発言をすることができない貧しいアイルランドの姿が重なる。

作品では、アイルランドとイングランドの間で揺れ動く Phineas のアイデンティティの問題についても描かれている。Phineas は帰属先が二つに分裂しており、“He felt that he had two identities, —that he was, as it were two separate persons, [...]” (*PF* 1: 330) とあるように、彼のアイデンティティはイングランドとアイルランドの間で揺れ動いている。その揺らぎは、アイルランドとイングランド両方の選挙区から立候補していることにも反映されている。アイルランドに関する問題に関わる場合、Phineas は党の利益よりも自分の意思を優先させる傾向にある。たとえば、同僚の Monk がアイルランドの小作人の権利を擁護する法案を提出したとき、その法案は党の方針に反するものであったが、Phineas はアイルランドのためにも Monk を支持する。アイルランドを選択すれば党との関係が破綻し、イングランドでの生活も危うくなる。一方、イングランドでの生活を維持するために党を支持すれば、アイルランドへの裏切りとなる。このように、Phineas の場合、アイルランドへの帰属意識はイングランドへの帰属意識

とは両立しないものとして描かれている。

トロロープがアイランドの生活に適応する際 Phineas と同じく、あまり裕福ではなかった。しかし、トロロープはイギリスの公務員であるため、イングランドでいくら失敗していても、アイランドでは何もせずとも支配者階級に属することになる。そのため、経済的安定と引き換えに何かを要求されることはなかった。それに対して、Phineas は自らのアイデンティティを保ちつつイギリスへの忠誠心を証明し続けなければならなかった。両者の違いは、宗主国とアイランドとの不平等な関係を反映している。

Phineas と党との関係と同じく、Laura の結婚もまたアイランドとイングランドの不平等な関係をよく表しており、当時の併合の状況をより正確に表したものだといえる。アイランドへの帰属意識を捨てることができない Phineas の姿は、Phineas への恋心を完全に消すことができない Laura の姿と重ねることができる。Laura は Kennedy と結婚すれば、閣僚である夫を通して政治的影響力を拡大できると考えた。そのため、Phineas への恋心を抱えたまま結婚するが、期待は裏切られることになる。夫は家で政治について議論することを好まず、彼女は自分の個性を発揮する場所を見出せないでいる。夫は妻の個性を認めないばかりか、自分のルールへの服従を求めてくる。そのため、結婚生活に充実を感じることができない。現状への不満から、Phineas の成功を切望するようになるが、その行動は夫婦仲をさらに悪化させていく。Phineas への恋心は党への背信行為と同じく結婚を破綻させるものである。そのため、フィニアン反乱に喩えることができる。Phineas への恋心が結婚前からのものであることから、Laura の結婚と同じく、結婚として表象される併合には最初の段階から問題の火種が存在していることをトロロープは指摘している。また、Phineas がアイランドの問題をきっかけに党に反乱を起こしたことから、アイ

ランドの問題が根本的に解決されない限り、反乱がいつ起こるかわからないことが示されている。

トロロープがフィニアンを支持することはない。しかし、Laura が夫に反抗するようになっていく過程を描くことによって、アイルランドにフィニアンのような反乱分子が生まれるのはイングランド側にも原因があることを示している。トロロープはアイルランドの立場からイングランド側の問題を指摘し、イングランド読者にアイルランドへの理解を促している。この態度はアイルランドへの好意に由来するものであるが、同時に、アイルランド併合の不安定さを指摘することにもなる。

作中人物 Phineas の成功はアイルランド併合を支持するトロロープにとって好ましいものといえるが、成功どころかアイルランドへの帰属意識から党の方針に逆らいアイルランドへ帰ることになる。イングランド側にも問題があるとはいえ、Phineas のアイルランドへの帰属意識から党との関係がうまくいかなかったように、彼の民族意識は社会に同化する際の障害になることが示されている。

Phineas の全く妥協をしない行動に完全には賛同しなくとも、トロロープが共感を覚えるのは政治問題に対してではなく、Phineas に対してである¹³⁾。また、信念を貫いた主人公が何の報いも与えられないまま終了しては読者も納得しないであろうと考えたのか、アイルランドに帰った Phineas は元同僚から年1000ポンドの職を与えられ、そのおかげで婚約者 Mary との結婚も無事に成立することになる。政府に与えられた公職につくことはイングランドとのつながりが完全に失われたわけではないことを示している。この結末はアイルランド併合がアイルランドに利益をもたらすということを暗示している。その一方で、Phineas の帰郷がアイルランド自治を連想させる点で、トロロープ本来の思想に綻びが生じる結果にもなっている。Phineas がイングランドから去ることになったのは、トロ

ロープが Phineas の行動を制御できなかったためである。そのため、アイランド併合の失敗というイメージと重なり、トロロープの主張と矛盾する結末となっている。併合を支持するトロロープとは矛盾する立場が共存するのはアイランドをテーマとした作品によくみられる特徴である。

(3) Phineas とイングランド社会

続編の *PR* では Phineas が元同僚から助力を求められ、再び国会議員になるべくアイランドからロンドンに戻ってくる。Phineas を再びロンドンに戻すため、*PR* 開始までに Mary は死亡したことにされる。これには、妻がいると安定した生活を捨ててまでロンドンに戻ってこないという理由のほか、Laura をはじめとした女性と交流させることで不貞を働いているという印象を読者に抱かせないためなど物語上の理由があると考えられる。結果的に、Mary はカトリック教徒アイランド女性であり、存在そのものがアイランドを象徴していることから、アイランド要素を作品から排除したことになる。最初の説明以後は Mary に触れることはほとんどなく、Phineas がカトリック教徒であることに触れる箇所もほとんどない。また、Phineas がアイランドへ帰郷することもないなど *PF* よりもアイランドとの関わりが希薄になっている。*PF* ではアイランドという妻側のアイデンティティを理解しようとしないうイングランドを批判的に描いていたが、物語を展開させるためとはいえ、トロロープ自身がアイリッシュネスを薄めるというイングランド人的な行動をとっている。

その一方で、*PR* でもイングランド側の問題点を指摘することを忘れていない。今作では Phineas と党との関係だけではなく、社会との関係についても描かれている。*PF* と同じく Phineas のアイリッシュネスはイングランド社会への同化を妨げる要素となる。*PF* において党の方針に反する行動をとった Phineas は、同僚 Bonteen から信頼できない人物であると

批判され、内閣入りの妨害をされる。党への背信行為がアイルランドへの帰属意識からくるものであったことを考えると、アイリッシュネスがイングランドでの成功を妨害していることになる。さらに、*PR* でも党の方針より自分の信念に従って投票したことから Bonteen と口論になる。その後 Bonteen が殺害されると、殺害の数時間前に口論していたなどという状況証拠により Phineas は逮捕され裁判にかけられることになる。今回 Phineas が党の方針に反する投票をしようと試みたとき、同僚から “A first fault may be forgiven when the sinner has in other respects been useful. The long and the short of it is that you must vote with us” (*PR* 1: 178) と説得されたように、党の方針に背く人間は罪人扱いされている。この喩え通り、党に背いた Phineas は殺人を犯した罪人として社会から排除されそうになる。殺人の容疑者はユダヤ系の Emilius 牧師と Phineas といういずれも移民である。このことから、この裁判は Phineas が社会に受け入れてよい人物であるか、それとも罪人として社会から排除すべき人物であるかを問うものであることがわかる。重要な証言の一つがアイルランド系貴族の息子である Lord Fawn からもたらされたように、裁判でもアイルランド要素は Phineas の不利に働く。当時の警察や司法が移民への偏見に影響されていたことをパナイーが指摘しているように¹⁴⁾、警察は Phineas が有罪であるという態度を示す。ここでは司法制度が移民に対して正常に機能しているかという問題が提起されている。政界でも、“certainly four-fifths of the members had made up their minds that Phineas Finn was the murderer” (*PR* 2: 84) とあるように、議員はほぼ全員が状況証拠から Phineas が殺人犯であると考えている。さらに、*PF* では共に政府の方針に逆らった Monk でさえ、Phineas が無実であるとは思っていない。勾留中の Phineas に “do not come unless you are able to tell me from your heart that you are sure of my innocence” (*PR* 2: 188) と言われた結果、二度と面会に訪れる

ことはなかった。Phineas は自分がともに働きたいと考えている人たちやその家族も自分が信頼できない人物であると考えていることに絶望する。結果的に Phineas は無罪になったが、打ちひしがれ、殺人現場を訪れる。そこで Phineas は “He looked down it with an awful dread, and stood there as though he were fascinated” (PR 2: 245) と述べられているように、仲間の議員たちが楽しむクラブよりも、殺人現場の方に引き寄せられている。現代ヨーロッパでも移民の子孫が経済格差や差別により社会から疎外された結果、過激思想に走ることがある。Phineas のように親イングランド派の人物でも冷遇されれば罪人側に傾くという状況を描くことによって、イングランド社会の移民に対する偏見という問題をトロロープは指摘している。

PR の終わりでは Phineas は同じ移民の立場にある Madame Goesler と結婚する。Dougherty が「結婚は伝統的によそ者が身内になることのできる手段である」と述べているように¹⁵⁾、イングランド女性と結婚すれば Phineas は完全にイングランド内部の人間となることができるというのに結婚したのは同じ移民の女性である。サイード (Edward Wadie Said 1935-2003) が「支配者の国で被支配者は支配者と同じ階級に属することは決してできなかった」と述べているように¹⁶⁾、アイランド生まれの Phineas が真の意味でイングランド人となることはなかった。Phineas がイングランド女性と結婚して幸福になれば、併合を正当化することにつながる。それにもかかわらず、Phineas がイングランド人女性と結婚できなかったのは、いくらアイランドに共感しようともトロロープに支配者としての意識が存在し続けているためである。アイランドが併合内に溶けこむ際の障害にはイングランド側の偏見だけではなく、階級意識もあることがわかる。Tracy が「トロロープの小説に浮かび上がってくる国はアイランドを取り込むことができないイギリスである」と述べているように¹⁷⁾、トロ

ローブが描くイギリスは Phineas の扱いにみられるようにアイルランドをうまく受け入れることができないどころか、むしろ排除しようとしてくる。このようなイギリス像はアイルランドの取り込みを目的とした併合の失敗を意味している。トロローブは「境界人」であるがゆえに、アイルランドとイングランドの状況をよく知っている。そのため、併合の維持は少なくとも現状のままでは不可能であると感じているのであろう。作中の比喻としての併合が失敗に終わることが多いのはこうした心情が作品に影響を及ぼしているためであると考えられる。

(4) Phineas とアイルランド自治運動

作品内のイングランドはアイルランドをうまく取り込むことはできなくとも、トロローブ個人はアイルランドをどうしても手放したくないと考えている。その気持ちは自治運動に対する反応に表れている。1870年代になるとアイルランドでは自治の動きがみられるようになる。「境界人」の特徴には自治に対する激しい反発があり、トロローブにも当てはまる。PRにおいても晩年ほどの激しさではないものの、自治に対する反発が書かれている。作中では併合の解消を意味する自治は離婚に喩えられている。併合を解消しようとする自治論者はトロローブにとって到底容認できない存在である。そのため、離婚にかかわる人物は問題に巻き込まれることになる。たとえば、Bonteen は Lady Eustace と夫 Emilius 牧師との離婚を成立させようとしていたところ、牧師に殺害されてしまう。離婚を試みる Bonteen は自治論者を象徴している。そのため、Bonteen に対する扱いには自治論者は排除されるべきであるというトロローブの考えが示されていることになる。また、離婚には至らなくとも別居した Kennedy 夫妻の場合、夫は死亡し、妻は海外で世捨て人のように生きていくことになる。この悲劇的な結末には、一度結婚した以上はいくら夫婦仲が悪くとも、離婚とし

て表象される併合の解消は到底認められるものではないというトロロープの考えが示されている。

PM では具体的に自治が話題に上がっている。作品内でトロロープは Phineas を自らの主張の代弁者として用いている。現実を忠実に反映させれば Phineas は自治を支持するべきであるが, “Surely something might be done to prove to his susceptible countryman that at the present moment no curse could be laid upon them so heavy as that of having to rule themselves apart from England” (PM 85) と, 自治に反する態度を示している。この発言では Phineas は地元アイランドの大衆を「影響されやすい (susceptible)」と形容している。トロロープもまたアイランドの大衆は指導者に影響されやすいと考えており, Letters to the *Examiner* において, “[The Irish] are [...] the more inclined to follow implicitly the guidance of a master, and to submit in all things to commands” (98) と述べている。トロロープがアイランドの大衆を影響されやすい存在として描くことに関して, King は, 「アイランド人は無力で, カトリック聖職者の影響を受けやすいので, より責任感のあるイギリス政府のような存在が実施する強い政策を必要とする, という植民地主義的主張」と述べているように¹⁸⁾, 植民地主義と結びつく可能性がある。Phineas が政界を志したのは友人の影響であったことから, もともと Phineas 自身が他人の影響を受けやすい人物であった。この発言から, Phineas が年月の経過によりトロロープと同じく植民地主義を思わせる視点からアイランドを見るようになったことがわかる。Phineas の変化は次の発言にも表れている。自治を許すのかと首相に尋ねられ, “Certainly not; —any more than I would allow a son to ruin himself because he asked me. But I would endeavour to teach them that they can get nothing by Home Rule” (PM 97) と発言しているように, 自治を許すのは息子の破滅を許すようなものと同郷人を息子に喩えている。PF

では Phineas の方がイングランドを親とする子供に喩えられており、同僚の議員から “I look upon you, you know, as in some sort my own child.” (PF 2: 274) と言われていた。このことから、同郷人を息子扱いする発言は Phineas が成熟し、アイルランドという息子を論ずイングランドの立場に位置するようになったことを示している。パナイーが「通常は世代を経るうちに起こってくる祖国の規範からイギリスの規範への移行は、言語、服装、食事のどの点から見ても、統合を示すもっともよい指標のひとつとなるのだ」と述べているように¹⁹⁾、イングランド側の視点を身につけた Phineas は統合の条件を満たしたことになる。アイリッシュネスという特性により社会と対立することもあったが、PM 以降は Phineas のアイリッシュネスが問題になることはなく、社会にうまく同化するようになった。このように、Phineas は年月の経過により、イングランドの価値観を身につけ、併合を支持するというトロロープの考える理想の英国人になった。

その結果、アイルランドとは距離が生まれることになった。Phineas は、“they can get nothing by Home Rule” (PM 97) と述べているように、アイルランドの大衆を指す際に “they” という単語を使うようになっている。この発言からは Phineas とアイルランドの大衆の間には心理的な距離があることが窺える。また、Phineas は現実ともかけ離れた存在となってしまった。当時のアイルランド議員であれば自治を支持するのが自然であるが、「もはやアイルランドでは当選することのないアイルランドの政治家」と Lonergan が述べているように²⁰⁾、実在のアイルランド議員とはかけ離れた人物像に変化してしまった。時期は不明であるが、グレゴリーが Phineas のことを「アイルランドの紳士に対する名誉棄損」²¹⁾と呼んだのは、トロロープの考えるアイルランド人像が現実のアイルランド像、少なくともグレゴリーが考えるアイルランド人像とは異なっていたからであると考えられる。

トロロープのアイランド

Phineas がアイランドから離れたのは、トロロープの変化が反映されているからである。*PF* や *PR* だけではなく、初期のアイランドテーマの作品ではアイランドの立場からアイランドで問題が生じる理由について記していた。しかし、自治運動が激しくなるにつれてイングランドの立場から描くようになり、自治を望む理由について触れることもない。自分が成功した場所としてアイランドに愛情を抱き、アイランドの苦境に共感的関心を示してきたが、アイランドの幸せはイングランドとの併合にあると考え、決してアイランドの独立を望むことはなかった。このように、トロロープがいくらアイランドに共感しようとも、所詮イングランド人の域を出ることはできなかったことがわかる。

おわりに

最初に登場した Phineas は、実際のアイランド移民の経歴と共通する部分もあり、典型的な移民像と呼べるぐらいであった。しかし、自治運動の高まりにより、現実よりもトロロープの主張の方を強く反映した人物へと変化した。Phineas の変化は、トロロープとアイランドの距離が開いていったことを示している。Phineas Finn にはアイランドにかかわった一人の知識人の複雑な内面がよく写し出されている。「境界人」にはアイランドの自治運動が高まると独立に反対するという特性があるが、Phineas にも通じるものである。

(文中、併合法実施後のアイランド住民に対して「アイランド移民」という表現は適切ではないが、地理的・歴史的・民族的文脈からその表現を用いた。)

注

この論文で用いたトロロープの作品は、以下の版による。

Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Ed. Michael Sadleir and Frederick Page.

- New York: Oxford UP, 1999.
- , *The New Zealander*. Ed. N. John Hall. Oxford: Clarendon Press, 1972.
- , *Phineas Finn*. Ed. Jacques Berthoud. New York: Oxford UP, 1999.
- , *Phineas Redux*. Ed. John C. Whale. New York: Oxford UP, 2000.
- , *The Prime Minister*. Ed. David Skilton. London: Omnium Publishing for The Trollope Society, 1991.
- . Trollope's Letters to the *Examiner*. Ed. Helen Garlinghouse King. Princeton University Library Chronicle 26(2) (1965): 71-101.

- 1) *The Examiner* 誌に送った手紙では、アイルランドをよく知る自分にはアイルランドについて意見を述べる資格があると述べている。

No Englishman has, I believe, had a wider opportunity than I have had of watching the changes which have taken place in Ireland during the last ten years, and I trust I may therefore be excused for presuming to offer an opinion on a subject which has been so long and so constantly under my notice. (Letters to the *Examiner* 77)

- 2) Jane Elizabeth Dougherty. "A Man of the House: Phineas Finn and the Quest for Irish Membership." *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. (Aldershot: Ashgate, 2004), p. 158.
- 3) 例えば、Nie はアイルランドとイングランドのイメージに関して次のように述べている。

For the objectified Irishman, Paddy, was always a peasant, a Catholic, and a Celt, while John Bull was Anglo-Saxon, Protestant, and (usually) middle-class. (Michael de Nie. "Britania's Sick Sister: Irish Identity and the British Press, 1798-1882." *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. (Aldershot: Ashgate, 2004), p. 174).

- 4) W. B. Yeats. *Autobiographies*. Hon-no-tomosya, 1990. Reprint Originally Published: (London: Macmillan, 1926), p. 126.
- 5) S. Gilley. "English Attitudes to the Irish in England 1789-1900." *Immigrants*

and Minorities in British Society. C. Holmes Ed. (London ; Boston : Allen & Unwin, 1978), p. 101.

- 6) R. F. Foster. *Paddy & Mr. Punch: Connection in Irish and English History*. (Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1995), p. 288.

日本語文献では以下を参考のこと。日下隆平, 「アイランドと周縁ーフリート街のアイランド人―」『イエイツとその周辺』(大学教育出版, 1999), pp. 36-48.

- 7) John Halperin. *Trollope and Politics: A Study of the Pallisers and Others*. London: Macmillan, 1977. 参考

- 8) R. F. Foster. *The Irish Story: Telling Tales and Making it up*. (New York: Oxford, 2004), p. 137.

- 9) Jane Elizabeth Dougherty. “Mr and Mrs England: the Act of Union as national marriage.” *Acts of Union: The Causes, contexts, and consequences of the Act of Union*. Ed. Daire Elizabeth and Kevin Whelan. (Dublin: Four Courts Press, 2001), p. 202.

- 10) このように、男性でありながら女性要素を持ち合わせるからこそ Phineas の最も注目すべきアイランド的な性質だと Dougherty は指摘している。
“[It] is Phineas’s gender hybridity, itself produced by the gender position of his country, which is his most noticeably ‘Irish’ quality” (Dougherty “A Man of the House” op. cit., p. 162).

- 11) Dougherty “A Man of the House” op. cit., p. 161.

- 12) Juliet McMaster. *Trollope’s Palliser Novels: Theme and Pattern*. (New York: Oxford, 1978), p. 52.

- 13) 作中人物 Madame Goesler も “you are to be in Parliament and say that this black thing is white, or that this white thing is black, because you like to take your salary! That cannot be honest!” (PF 2: 271) と述べ、いきすぎる党派政治に対して快く思っていない。

トロロープはその生前中は未発表であった *The New Zealander* において同様のことを述べている。

Each honourable member who is induced by any circumstances to vote that Black is White does whatever in him lies to destroy the honour of England

[...] (*The New Zealander* 130).

- 14) パニコス・パナイ『近現代イギリス移民の歴史：寛容と排除に揺れた二〇〇年の歩み』浜井祐三子，溝上宏美訳（人文書院 2016年），p. 303.
- 15) Dougherty “A Man of the House” op. cit., p.163.
- 16) サイードは植民地における支配者と被支配者の関係について次のように述べている。

アイルランド人はけっしてイギリス人にはなれなかったが，カンボジア人やアルジェリア人もけっしてフランス人にはなれなかったのである。これは，あらゆる植民地関係に共通していたようにわたしには思われる。なぜなら，支配者と被支配者のあいだに，たとえ被支配者が白人であっても，明確で絶対的な階層区分を常に維持しなければならないというのが第一原理であったからだ。

(E. W. サイード『文化と帝国主義』大橋洋一 訳（みすず書房 2001年），pp. 66-7.)

- 17) Thomas Tracy. *Irishness and Womanhood in Nineteenth-Century British Writing* (London: Ashgate, 2009), p. 156
- 18) Carla King. Neil McCaw. “Some Victorian Novels and the Irish Land Question.” *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. (Aldershot: Ashgate, 2004), p. 219.
- 19) パナイ op. cit., p. 206.
- 20) Lonergan op. cit., p. 151.
- 21) Escott op. cit., p. 266.

参考文献

The Primary Sources

- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Ed. Michael Sadleir and Frederick Page. New York: Oxford UP, 1999.
- . *The New Zealander*. Ed. N. John Hall. Oxford: Clarendon Press, 1972.
- . *Phineas Finn*. Ed. Jacques Berthoud. New York: Oxford UP, 1999.
- . *Phineas Redux*. Ed. John C. Whale. New York: Oxford UP, 2000.

- . *The Prime Minister*. Ed. David Skilton. London:Omnium Publishing for The Trollope Society, 1991.
- . Trollope's Letters to the *Examiner*. Ed. Helen Garlinghouse King. Princeton University Library Chronicle 26(2) (1965): 71-101.

The Secondary Sources

- Dougherty, Jane Elizabeth. "A Man of the House: Phineas Finn and the Quest for Irish Membership." *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. Aldershot: Ashgate, 2004.
- . "Mr and Mrs England: the Act of Union as national marriage." *Acts of Union: The Causes, contexts, and consequences of the Act of Union*. Ed. Daire Elizabeth and Kevin Whelan. Dublin: Four Courts Press, 2001.
- Escott, T. H. S. *Anthony Trollope: His Public Services Private Friends and Literary Originals*. Hhonorolulu: UP of the Pacific, 2004.
- Foster, R. F. *Paddy & Mr. Punch: Connection in Irish and English History*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1995.
- . *The Irish Story: Telling Tales and Making it up*. New York: Oxford, 2004.
- Gilley, S. "English Attitudes to the Irish in England 1789-1900." *Immigrants and Minorities in British Society*. C. Holmes Ed. London; Boston: Allen & Unwin, 1978.
- Halperin, John. *Trollope and Politics: A Study of the Pallisers and Others*. London: Macmillan, 1977.
- King, Carla. McCaw, Neil. "Some Victorian Novels and the Irish Land Question." *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. Aldershot: Ashgate, 2004.
- Loneragan, Patrick. "The Representation of Phineas Finn: Anthony Trollope's Paliser Series and Victorian Ireland." *Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004): 147-158.
- McCourt, John. *Writing the frontier: Anthony Trollope between Britain and Ireland*. Oxford: Oxford UP, 2015.

- McMaster, Juliet. *Trollope's Palliser Novels: Theme and Pattern*. New York: Oxford, 1978.
- Nie, Michael de. "Britania's Sick Sister: Irish Identity and the British Press, 1798-1882." *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture*. Ed. Neil McCaw. Aldershot: Ashgate, 2004.
- Tracy, Thomas. *Irishness and Womanhood in Nineteenth-Century British Writing*. London: Ashgate, 2009.
- Yeats W. B. *Autobiographies*. Hon-no-tomosya, 1990. Reprint Originally Published: London: Macmillan, 1926.
- E. W. サイド『文化と帝国主義』大橋洋一 訳 みすず書房 2001年。
- 日下隆平, 「アイルランドと周縁ーフリート街のアイルランド人ー」『イエイツとその周辺』大学教育出版, 1999年, pp. 36-48。
- パニコス・バナイー『近現代イギリス移民の歴史: 寛容と排除に揺れた二〇〇年の歩み』浜井祐三子, 溝上宏美訳 人文書院 2016年。

Anthony Trollope between England and Ireland

FUJII Ayako

This paper is chiefly concerned with Anthony Trollope's (1815-82) view about Ireland in his novels featuring a young Irish man, Phineas Finn.

Anthony Trollope was a novelist in the Victorian age. Ireland was a significant place to Trollope, and his experience in Ireland had a great influence on his life and his novels. Trollope wrote several Irish-themed works. The most notable character in these works is Phineas Finn. Phineas is the protagonist of *Phineas Finn* (1869) and *Phineas Redux* (1874), and he also appears in other works which were written after the 1870s, when Irish Home Rule intensified. Therefore, Phineas is extremely important to understand Trollope's view of Ireland and the changes in Trollope's view of Ireland over the years.

The Union between England and Ireland has been depicted as an image of marriage, and Trollope uses this metaphor in the novels. He compares the Union to not only the relationship between Phineas and the Liberal Party but also the marriage of Mr. and Lady Laura Kennedy. Phineas's relationship with the party and Laura's marriage are portrayed as unsuccessful marriages, and have much in common with the Union. Trollope informs the readers of the problems of the Union with the examples of Phineas and Laura.

Phineas tries to assimilate into England but can never become an insider of England, as the Irish can never become English in England. This shows that Trollope writes the novel from the perspective of the English.

Trollope opposes the Irish Home Rule movement, which is shown in the marriage of Mr. Kennedy and Laura. Eventually, Laura leaves her husband,

and their marriage ends in disastrous failure. Their situation shows Trollope's belief that the resolution of the Union, represented as a divorce, is far from acceptable.

Phineas opposes Home Rule, reflecting Trollope's view, but this attitude is far from that of the real Irish MPs of the time. Initially, Phineas had something in common with actual Irish immigrants, and in fact was a typical immigrant. But as the Home Rule movement became more prominent, Trollope's view is more strongly reflected in Phineas than reality. The changes in Phineas indicate that the psychological distance between Trollope and Ireland increased. Phineas Finn captures the complex mind of an English novelist.